

# 消化器内視鏡関連の偶発症に関する第二回全国調査報告 1988年より1992年までの5年間

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-08-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金子, 榮藏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/2374">http://hdl.handle.net/10271/2374</a>

## =偶発症アンケート (1988~1992) 集計報告=

## 消化器内視鏡関連の偶発症に関する第二回全国調査報告

1988年より1992年までの5年間

浜松医科大学 第1内科

金子 榮藏

本学会では安全な内視鏡検査の一助とするため、5年毎に消化器内視鏡に関連した偶発症の調査を行うこととし、その第一回の調査は春日井を中心とする本学会偶発症対策委員会<sup>1)</sup>によって1983年から1987年の5年間について行われた。今回の第二回調査は、それに続く1988年(昭和63年)から1992年(平成4年)の5年間について実施した。今回の報告ではさらにそれ以前に実施された竹本<sup>2)</sup>、並木<sup>3)</sup>の集計も参考にし、最近20年間の偶発症の変遷をも明らかにした。

## I 調査対象と方法など

アンケート依頼施設は、本会評議員、指導医、認定指導医などが所属する施設等あわせて1,374施設、会員数で2,006名である。調査対象は、a) 一般内視鏡、b) 腹腔鏡、c) 経皮的肝生検、PTCなどの内視鏡以外の処置、の3つのカテゴリーに大別されるが、本報告はこれらの内、a) と b) の内視鏡に関連した偶発症について行った。調査内容は、a) 5年間の年度別検査件数、b) 前処置も含めた検査別偶発症発生数、その内容、c) 偶発症例の転帰、d) 医事紛争、e) 術者の事故、などである。

## II 結果

アンケートの回収率は50%であった。Table 1は過去3回と今回の報告の一般内視鏡検査について、アンケートの集計状況、総検査件数、偶発症発生数、そしてその頻度を示したものである。今回注目すべきは、検査総数が800万件を超え、過去の調査と較べ著しく増加したこと、それに偶発症の頻度が今回率にして0.061%と春日井の報告より増加したことである。死亡率では春日井の報告とほぼ同率であった。

一般内視鏡、腹腔鏡合わせて、偶発症の発生頻度を機種別に見ると(Table 2)、偶発症の総数は5,205件で、そのうち上部消化管検査によるものが76%を占め最も多い。頻度的にみると、上部消化管検査と大腸検査はほぼ同率で、約2,000検査に1件の割合である。これらの中で発生頻度が0.1%を超えるものはERCPやESTを含む側視型十二指腸スコープ検査と腹腔鏡関連のものとなり、とくに胆嚢摘出術は1.6%と高率であった。

一般内視鏡前処置による偶発症では今回2,011件の偶発症例が寄せられ、死亡例はその129名であった。偶発症の頻度では春日井の報告の2倍、死亡率ではほぼ同率

Table 1 主な偶発症調査報告の偶発症の頻度…一般内視鏡

報告者	調査年	発送数	回答数	回答率	検査総数	発症数	発生率 %
竹本	~1975	416	214	51.4 %	1,206,934	1,872	0.155
並木	1977~1982	1,010	697	69.0	5,801,549	1,568	0.027
春日井	1983~1987	1,436	537	37.2	4,425,654	1,067	0.024
今回	1988~1992	1,375	687	50.0	8,068,439	4,955	0.061
計		4,237	2,135	50.4	19,502,576	9,462	0.049

Table 2 機種別検査件数・偶発症全体概観

機種	検査例数	偶発症数	発生頻度 %
上部消化管スコープ	6,346,001	3,958	0.062
側視十二指腸スコープ	273,284	282	0.103
大・小腸スコープ	1,346,469	688	0.051
胆道スコープ	20,486	20	0.098
超音波スコープ	82,189	7	0.009
腹腔鏡(検査)	28,050	50	0.178
腹腔鏡(胆摘)	12,465	200	1.604
その他	5,013	0	0
計	8,113,967	5,205	0.064

Table 3 機種別検査件数・死亡頻度

機種	死亡例数	発生頻度 %
上部消化管スコープ	47	0.0007
側視十二指腸スコープ	24	0.0088
大・小腸スコープ	14	0.0010
胆道スコープ	1	0.0049
超音波スコープ	0	0
腹腔鏡(検査)	1	
腹腔鏡(胆摘)	15	0.0123
他の腹腔鏡手術	3*	
計	91	0.0011

\*: 癒着剥離1例、S状結腸切除2例

であった。

検査自体に関連した死亡例は全体で91例で(Table 3), 総検査数の0.001%に相当する。このうち側視型十二指腸スコープと腹腔鏡関連で死亡率が高く約1万検査に1例の死亡となっていた。

静脈硬化療法, ERCP, ESTなどの偶発症は過去の結果と較べ今回ももっとも低値でこれらの手技がより安全なものになりつつあることが確認できた。

粘膜切除術の偶発症は0.087%とポリペクトミーと同頻度で本法は比較的安全に行われていた。

死亡例の年齢分布をみると, その半数を70歳以上の高齢者が占め, 60歳以上では80%を越える。高齢者の内視鏡には細心の注意が必要である。

腹腔鏡では, 新たな展開として腹腔鏡下胆嚢摘出術に始まる腹腔鏡下手術がある。手技別の偶発症発生頻度をみると, 一般的腹腔鏡検査0.17%と較べ胆嚢摘出術など

の新しい手技で1.6%と偶発症の頻度が高くなっていた。

今回の集計では, 春日井の集計と較べ4倍の術者の事故が寄せられた。頻度は0.001%で, 10万検査に1件の割合で事故が発生している。とくに注目すべきは, 肝炎ウイルスの感染が68件と比較的多数報告されたことである。

### III おわりに

アンケートをお寄せ頂いた会員各位に深謝します。本報告の詳細は別に本学会誌の37巻3号に掲載した。

### 文 献

- 1) 春日井達造他: Gastroenterol Endosc 1989; 31: 2214
- 2) 竹本忠良: Gastroenterol Endosc 1976; 18: 183
- 3) 並木正義: Gastroenterol Endosc 1984; 26: 2439